

ぬいぐるみを抱くことが動物写真に対する感情反応に及ぼす影響

北村 明日香

私たちは、日常生活でさまざまな身体感覚を受け取っている。身体感覚には、触覚、嗅覚、味覚等さまざまな種類があるが、中でも私たちは触覚（皮膚と対象との接触）によって外界と強く結びついている（仲谷他，2016）。本研究では、身体感覚の中でも触覚、特に柔らかさが、ヒトの感情反応に及ぼす影響を検討するために、2つの実験を行った。

感情喚起刺激として動物の写真を使用し、ぬいぐるみを抱く/抱かないの参加者内 2 条件で触覚を操作した。ぬいぐるみとしては、抱き枕型通信メディア「ハグビー (Hugvie)®」を用い、写真を見ているときの感情反応を測定した。先行研究をもとに、ぬいぐるみを抱くときは抱かないときに比べて、(1) ポジティブ感情はよりポジティブに、ネガティブ感情はよりネガティブになる、(2) 写真に対する感情反応は増大するという仮説を立てた。

実験 1 には、40 名の大学生が参加した。快・中性・不快と評定される動物写真が 1 枚ずつランダムな順序で各 6 秒間提示された。参加者は、それぞれの写真の提示後に「感情価」「覚醒度」「接近-回避動機づけ」「かわいいと感じるか」を各項目 9 段階で評定した。また、写真を見ている間の表情筋筋電図（大頬骨筋、眼輪筋、皺眉筋）と心電図、皮膚コンダクタンス水準を測定した。実験の結果、写真に対する評定値はぬいぐるみの有無によってほとんど影響を受けなかったが、ぬいぐるみを抱くときの方が快写真に対する「かわいい」の評定値が有意に高かった。写真に対する表情筋反応に、ぬいぐるみを抱く効果は認められなかった。しかし、ぬいぐるみを抱くときはそうでないときに比べて、写真を見る前から眼輪筋の活動量が大きく、皺眉筋の活動量が小さい傾向があった。眼輪筋活動は快の指標であり、皺眉筋活動は不快の指標であることから、ぬいぐるみを抱くことで持続的に快が強まり不快が弱まること示唆された。心拍数や心拍変動、皮膚コンダクタンス水準には条件差はなかった。

実験 2 には、25 名の大学生が参加した。快感情を引き起こすかわいい動物の写真を刺激として、2 分 30 秒間（刺激提示前ベースライン 30 秒・提示中 90 秒・後安静 30 秒）のライドショーを提示した。見ている間の表情をビデオで撮影し、ライドショー前後で気分質問紙 (positive and negative affect schedule: PANAS) に回答を求めた。表情解析ソフトで動画を分析し、笑顔の表出に関連した「happy」の値を 0.2 秒ごとに求めた。刺激提示中はベースラインと比べて happy 得点が高まった。しかし、ぬいぐるみを抱く効果は表情反応には認められなかった。気分質問紙の結果から、ぬいぐるみを抱くときはそうでないときよりもネガティブ感情 (NA) 得点が低いことが示された。ぬいぐるみの有無にかかわらず、ライドショーを見ると、ポジティブ感情 (PA) 得点とネガティブ感情 (NA) 得点がどちらも低下した。これは、ライドショーを見ることで全体的に覚醒度が下がり、リラックスしたことを意味する。ぬいぐるみを抱くことで感情反応が大きくなるという仮説は支持されなかった。

以上の結果から、ぬいぐるみを抱くことは、(1) ポジティブ感情を増加させるというよりはネガティブ感情を低減させる効果があること、(2) 写真に対する感情反応の大きさには影響しないことが示された。触覚情報が制限されるコロナ禍の時代に、ぬいぐるみを抱くという触覚条件の操作によって、人々の感情をより穏やかな方向に誘導する可能性が見出せたといえる。（基礎心理学）